

1) 経過観察健康診査の受診状況に関する調査

(江戸川区清新町保健所)

—ハイリスク因子の検討—

前川 喜平* 副田 敦裕**

1. はじめに

保健所で行なわれている経過観察健康診査は、乳児健康診査、1歳6カ月児健康診査、3歳児健康診査や保健婦および地域医療機関や保育所などからの紹介により、発育の異常、運動精神発達の異常や行動上の問題などの理由で、経過観察を必要とされる児に対して実施されている健康診査である。

今回私たちは、この経過観察健康診査の状況を調査することにより、保健所側の立場からとらえられたハイリスクとされる因子を明確にできると考え調査検討したので報告する。

2. 対象および方法

対象は、江戸川区清新町保健相談所管内に在住の児で、昭和60年1月～昭和60年8月および昭和61年1月～昭和61年12月に出生し、経過観察健康診査を受診した186名である。

これらの児に対して、母子管理カードをもとに、経過観察健康診査の受診時期、受診回数、受診理由などについて調査した。

3. 結 果

1) 経過観察健康診査の受診時期

経過観察健康診査の受診時期は、表1に示した。

対象児186名のうち、乳児期に受診した児は171名で、全体の91.9%を占めた。また特に4カ月児健康診査の結果により受診を勧められることが多いため、4～5カ月の時期での受診が146名と多く、全体の78.5%であった。

2) 経過観察健康診査の受診回数

各受診児の受診回数については表2に示したが、1回のみの受診児が94名と約半数を占めていた。乳児期においては、1回のみの受診者は171名中84名(49.1%)であった。

表1 経過観察健康診査の初回受診時期

受診時期	受診者数
1カ月	1名
3カ月	3名
4カ月	93名
5カ月	54名
6～12カ月	20名
1歳1～6カ月	2名
1歳7カ月～2歳	5名
2歳	2名
3歳	5名
4歳	1名

*慈恵医大小児科

**国立大蔵病院小児科

表2 経過観察健康診査の受診回数

受診回数	受診者数
乳児	
1回	84名
2回	45名
3回	17名
4回	11名
5回	7名
6回	4名
7回	2名
8回	1名
1歳以後	
1回	10名
2回	4名
6回	1名

3) 経過観察健康診査の受診理由

対象児の経過観察健康診査の初回受診時の受診理由についてその延べ数を表3に示した。

4カ月児健康診査の受診時期までの受診理由の多くは、主に4カ月児健康診査で首の座りが不完全であるとされたことにより、その後の発達の状態を確認するためであった。その他の理由としては、筋緊張の異常、追視の状況の異常、頭囲等の問題、体重増加の不良などがあげられた。

4カ月児健康診査受診以後の乳児では、寝返りや這い這いの状況、筋緊張の異常などが受診理由としてあげられていた。また1歳以後の児の受診理由では、言葉の問題や身体発育の問題があげられていた。

4) 妊娠経過および新生児期の異常

妊娠経過や新生児期の異常として保健所において把握できたものについて、その延べ数を表4に示した。

妊娠経過中の異常としては、蛋白尿、糖尿、浮腫、貧血などがみられた。また分娩形式では、帝王切開が14名、吸引分娩が12名、鉗子分娩が1名、骨盤位分娩が1名確認されていた。

表3 経過観察健康診査の初回受診理由

表3-1 1カ月時～4カ月児健康診査受診時までの乳児

受診理由	受診者延べ数
定額確認、引き起こして頭がついてこない 腹臥位で頭をあげない	113名
筋緊張 弱い	2名
筋緊張 強い	6名
下肢の緊張強い	4名
下肢をつっぱる	3名
そりかえりが強い	8名
腹臥位で手が後ろへいく	1名
体が右へ傾く	1名
指の握り強い	5名
頭囲が小さい	2名
頭囲が大きい	1名
大泉門が狭い	1名
大泉門が大きい	1名
頭蓋変形	1名
長頭	1名
体重増加不良	10名
吐きやすい	1名
追視不良	13名
開排制限	6名
斜頸	3名
頭血腫	1名
下肢の色が悪い	1名
下肢をびくつかせる	1名
手をふるわせる	1名
血管腫	1名
内斜視	1名
散瞳している	1名
陰囊水腫	1名
低出生体重児	2名
重症仮死	1名

新生児期の異常としては、黄疸のため光線療法を施行されたものが21名みられ、その他、新生児仮死、黄疸遷延、呼吸障害等がみられた。また保育器を使用されたとした児は21名みられていた。

また対象児のうち、早期産児は17名みられ、低出生体重児は15名で、巨大児は4名であった。

表3-2 4カ月児健康診査受診以後の乳児

受診理由	受診者延べ数
寝返りしない	3名
背這いする	1名
そりかえりかゆい	1名
ハイハイが遅い	3名
ハイハイの形がおかしい	1名
下腕が弱い	2名
肘の力が弱い	1名
体重が少ない	1名
斜視	1名
心雑音	2名
左目を閉じない	1名
手足を発作的につっぱる	1名
小奇形	1名

表3-3 1歳以後の児

受診理由	受診者延べ数
四つ這いしない	1名
うまく歩けない	1名
言葉が遅い	3名
身長が低い	4名
聴力が心配	1名
奇声を発する	1名
鼠径ヘルニア	1名
停留睪丸	3名
微熱がある	1名
動悸がみられる	1名

4. 考 案

経過観察健康診査の実施状況を調査することにより、保健所側からとらえたハイリスク因子について検討した。

経過観察健康診査の受診児の多くは、4カ月児健康診査の結果より受診を勧められたものであった。また受診児の約90%は乳児期に受診していた。しかしこれらの児の約半数は1回のみの受診児であった。

経過観察健康診査の受診理由は、4カ月児健康診査で首の座りが不完全であるとされたためによるものが多くを占めていた。そのほかの受診理由としては、筋緊張、追視、頭囲、体重などの問題、また4カ月以後の乳児では寝返りや

表4 妊娠経過および新生児期の異常

表4-1 妊娠・分娩経過の異常

項目	延べ数
浮腫	22名
蛋白尿	59名
高血圧	9名
糖尿	23名
貧血	10名
切迫流産	4名
切迫早産	1名
トキソプラズマ感染	1名
子宮筋腫	1名
微弱陣痛	3名
前期破水	6名
早期破水	1名
切迫仮死	2名
前置胎盤	1名
胎盤早期剥離	1名
臍帯巻絡	2名
羊水混濁	1名
誘発分娩	7名
吸引分娩	12名
鉗子分娩	1名
骨盤位分娩	1名
帝王切開	14名

這い這いの状況、1歳以後では言葉や身長の問題などもあげられていた。

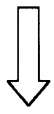
これらの受診理由からは、各月齢に対する粗大運動の発達段階が主に問題として取り上げられており、そのほかには筋緊張の異常や身体発育の状況などが主に取り上げられていることがうかがわれた。また主に運動発達での問題点が指標とされており、精神発達と直接関連が深いと思われるものは、乳児期では追視の状況のみで、その評価の困難さを示しているものと考えられた。1歳以後になると言葉の問題が多く取り上げられるようになり、今回は報告しなかったが、調査対象児の中でも経過観察健康診査での健診を終了とされた児で、再度1歳6カ月児健康診査や3歳児健康診査において言葉の発達状況が問題とされた児が認められていた。

表4-2 新生児期の異常

項目	延べ数
新生児仮死	6名
黄疸（光線療法）	21名
黄疸遷延	5名
呼吸障害	3名
羊水吸引	1名
硬膜下出血	1名
くも膜下出血	1名
メレナ	1名
新生児痙攣	1名
心疾患	1名
奇形	1名
髄膜炎	1名
哺乳力不良	1名
経管栄養	2名
保育器使用	21名
早期産児	17名
在胎週数 36週	12名
34週	1名
33週	1名
31週	3名
低出生体重児	15名
2499g～2000g	11名
1999g～1500g	3名
1499g～1000g	1名
巨大児	
4000g以上	4名

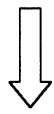
妊娠分娩経過や新生児期の異常は、妊娠中の母親の浮腫、蛋白尿、高血圧、糖尿などの出現や出生児の在胎週数、出生体重、黄疸、保育器の使用などが主なものとしてあげられたが、これらの状況は多くは母子健康手帳や母親からの問診の結果より把握されることとなるため、いわゆるハイリスク因子の把握としては不十分なものと考えられた。

以上、経過観察健康診査の実施状況を調査することにより、保健所側から健診を実施していくうえでハイリスクとして捉えられるものについて検討したが、主には粗大運動の発達段階が問題として取り上げられており、そのほかには筋緊張や身体発育の異常があげられていた。また妊娠経過や新生児期の異常としては妊娠中毒症に関するものや在胎週数や出生体重は把握されるが、その他のハイリスク因子としては黄疸や保育器の使用などがあげられたが比較的把握しづらい点が指摘された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. はじめに

保健所で行なわれている経過観察健康診査は、乳児健康診査、1歳6ヵ月児健康診査、3歳児健康診査や保健婦および地域医療機関や保育所などからの紹介により、発育の異常、運動精神発達の異常や行動上の問題などの理由で、経過観察を必要とされる児に対して実施されている健康診査である。

今回私たちは、この経過観察健康診査の状況を調査することにより、保健所側の立場からとらえられたハイリスクとされる因子を明確にできると考え調査検討したので報告する。